大津皇子の謎

青木　康廣（真美ヶ丘）

葛城山系の北端に、見る人の心に、一際ピリオドを打つように聳えている二つの峰、それが二上山です。往時、大和と河内の国境として、又現世と浄土の境界として、古代より人々の心を魅了しました。

この、二つの峰から大きく裾野をせり出す秀麗な姿は、飛鳥人が後世にいわれる「西方浄土」の山として崇め、親しんだことが納得させられます。その二上山と、山頂に眠る悲劇の皇子、大津皇子に関わる、ひとときの謎を追ってみましょう。

一、大津皇子の処刑

『日本書紀』巻二九の天武紀では、朱鳥元（六八六）年九月九日、天武天皇が崩じ、鸕野皇后が天皇に代わり政務を執ります。巻三〇持統紀、冬十月二日、皇子大津の謀反が発覚、皇子大津、他三〇名を逮捕します。翌三日、皇子大津、訳語田（桜井市戒重か）の舎で賜死しています。ときに年二四、妃の皇女山辺は、髪を振り乱し裸足で走っていき、後を追って死んだとあります。

死は刑死、川島皇子が、謀反のよしを朝廷に密告して、直ちに処刑されたということは、疑う余地のない事実でしょう。

しかし大津皇子に、謀反の意志があったかどうかは甚だ疑わしく、鸕野皇后側が、皇位継承の転機に際し、我が子、草壁皇子を推すが故の陰謀であったとする見方が強くあります。

二上山の遠望（訳語田あたりから筆者撮影）

二、埋葬そして移葬

生前の大津皇子について、『懐風藻』によると、「容止墻岸しく、音辞俊朗なり」と記されるよう、美貌の持ち主で、文武に優れ、礼節を重んじたとされています。その大津皇子が、刑死されるとやがて馬来田の池の畔に葬られ、密やかな墓がつくられたとあります。

人望厚き故、優れた人柄に惹かれていた人達は、宮廷の人目を避け、又宮廷内の者達も、鸕野皇后に隠れるように、墓に詣でたとされています。

また、この年はどうしたことか、時期外れの夜の雷が轟き、閃く光は妖しい尾を曳いて馬来田の墓地に消え、墓からは怨霊の鬼火が燃えると、風聞が絶えないとされました。そういう囁きのもと、鸕野皇后の命により大津皇子の墓を、馬来田から二上山に移されたといいます。事実、「万葉集」においても、二上山への移葬は間違いのないものです。

三、二上山への道

さて、その移葬の地として何故、二上山を選んだのかが、大きな謎でありますが、或説、又考えられる理由を挙げてみましょう。

(1) 幼くして母を失い、大来皇女（大津の姉）と大津が、二人して育った訳語田の館より日の沈む二上山を眺め、母を慕う懐いに駆られ、その二上山の山景から、姉弟の寄添う姿をつのる大来皇女の、強い望みによるものであったのではないでしょうか。

(2) 罪人として、刑死さしめた大津に対し、墓を詣でる衆人が、後が絶えない故、遠く足のくよう、鸕野皇后が、遥か二上山に移したものです。

(3) 馬来田の墓に起きる、怪奇な風聞に対し大津の怨霊を封じ込めるため。

(4) 鸕野皇后の策略で、死に至らしめた大津に対して、心の科を軽減さしめ、飛鳥のどの地からも、二上山を眺められることに詫びる気持ちがあったのではないでしょうか。

(5) 優俊にして、政務にすぐれ、衆望を集めた大津の人柄故、古くからの王陵の谷としての、又後世にいわれる「西方浄土」のように崇めている二上山が、最もふさわしく思われます。

以上の事柄を、羅列したがどれをとっても謎深く、証明するものはなにもありません。

謎を追って、最後に私は二上山、大津皇子の陵墓に立ってみました。

遠景に飛鳥が見渡せる、石柱に囲われた小高い雑木林、その陵墓に号く風の音、頂は哀しみに充ちています。悲劇の皇子、大津皇子が永遠に眠る「ふたかみ山」は、今もなおみる人の心を揺り動かさずにはいられません。

まさにそれは、「あやしき山」です。